

クレジット:

UTokyo Online Education 数値解析 2017 松尾宇泰

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



■ Gauss の消去法

枢軸選択付き Gauss の消去法のアルゴリズム

【前進消去】

```

for k := 1 to n - 1 {
  |A[i, k]| (k ≤ i ≤ n) を最大にする i を探す (※)
  b[i] と b[k] を交換 (※)
  for j := k to n { A[i, j] と A[k, j] を交換 } (※)
  w := 1/A[k, k]
  for i := k + 1 to n {
    M[i, k] := A[i, k] × w
    for j := k + 1 to n {
      A[i, j] = A[i, j] - M[i, k] × A[k, j]
    }
    b[i] := b[i] - M[i, k] × b[k]
  }
}
    
```

【後退代入】

```

for i := n to 1 {
  x[i] := (b[i] - ∑j=i+1n A[i, j] × x[j])/A[i, i]
}
    
```

注意：実際には、 $M[i, k]$  は  $A[i, k]$  に上書きするか（→ LU 分解），あるいは単に変数  $m$  として持ち保存しない。また後退代入時はわざわざ  $\mathbf{x}$  をとらず  $\mathbf{b}$  に書き込むのが通例。（つまりこの手続きを呼び出すと、行列  $A$ ，ベクトル  $\mathbf{b}$  は破壊され、代わりに  $\mathbf{b}$  に解が入る。）枢軸選択なしの場合は（※）部分を削除。

LU 分解のアルゴリズム

```

for i := 1 to n { p[i] := i }
for k := 1 to n - 1 {
  |A[i, k]| (k ≤ i ≤ n) を最大にする i を探す
  p[i] と p[k] を交換
  for j := 1 to n { A[i, j] と A[k, j] を交換 }
  w := 1/A[k, k]
  for i := k + 1 to n {
    A[i, k] := A[i, k] × w
    for j := k + 1 to n {
      A[i, j] = A[i, j] - A[i, k] × A[k, j]
    }
  }
}
}
    
```

注意：行列  $A$  と空のベクトル  $\mathbf{p}$  を渡すと、 $A$  に LU 分解形が上書きされ、 $\mathbf{p}$  に行交換情報が入る。

## ■ベクトルと行列のノルム

線形空間  $X$  の要素  $x$  に実数  $\|x\|$  が対応し、次の4つの条件を満たすとき、 $\|x\|$  を「ノルム」と呼ぶ：  
(i)  $\|x\| \geq 0$ , (ii)  $\|ax\| = |a|\|x\|$  ( $a \in \mathbb{C}$ ), (iii)  $\|x\| = 0 \Leftrightarrow x = 0$ , (iv)  $\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$  ( $y \in X$ ).

以下、 $p \in \{1, 2, \dots, \infty\}$  とする.

ベクトルのノルム： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$  に対して、 $\|\mathbf{x}\|_p = (|x_1|^p + |x_2|^p + \dots + |x_n|^p)^{1/p}$ .

行列のノルム： $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$  に対して、 $\|A\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}$ .

このように定義された行列のノルムは、特に  $p = 1, 2, \infty$  の場合に、以下の等式を満たす.

**定理 1**  $\|A\|_1 = \max_{1 \leq j \leq n} \sum_{i=1}^n |a_{ij}|$  (最大列和),  $\|A\|_\infty = \max_{1 \leq i \leq n} \sum_{j=1}^n |a_{ij}|$  (最大行和),

$\|A\|_2 = A$  の最大特異値  $= \sqrt{\rho(A^T A)}$  ( $\rho(B)$  は行列  $B$  のスペクトル半径).

(証明) 略. 講義で紹介した参考書を参照. □

次の不等式はよく用いられる.

**定理 2**  $\|A\mathbf{x}\|_p \leq \|A\|_p \|\mathbf{x}\|_p$ ,  $\|AB\|_p \leq \|A\|_p \|B\|_p$  ( $p = 1, 2, \dots, \infty$ ).

(証明) 定義より、任意の  $\mathbf{x}$  に対して

$$\|A\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p} \geq \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}.$$

1 番目の不等式はこれから明らか. 2 番目の不等式は,

$$\|AB\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|AB\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p} \leq \|A\|_p \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|B\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}$$

から得られる. ただし、ここで1番目の不等式を使った. □

注意：行列のノルムは、上の他に Frobenius ノルム

$$\|A\|_F := \sqrt{\sum_{i,j=1}^N |a_{ij}|^2}$$

もよく使われる. これに対しても  $\|AB\|_F \leq \|A\|_F \|B\|_F$  が成り立つ.